

Figure 1 (1-6)  
安井算哲 (B) vs 本因坊道策 (W),  
1670-10-17

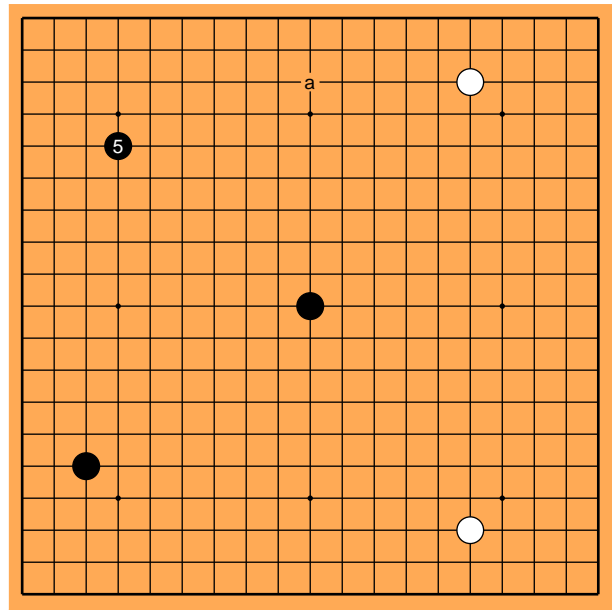


Diagram 1.1

Diagram 1.1

Black 5:  
黒5は実戦のaより変化図の方が天元を働かす布石である。

\*\*\*smile\_aceコメント  
黒1、3、5の空間が3つの石に連係を感じさせる。

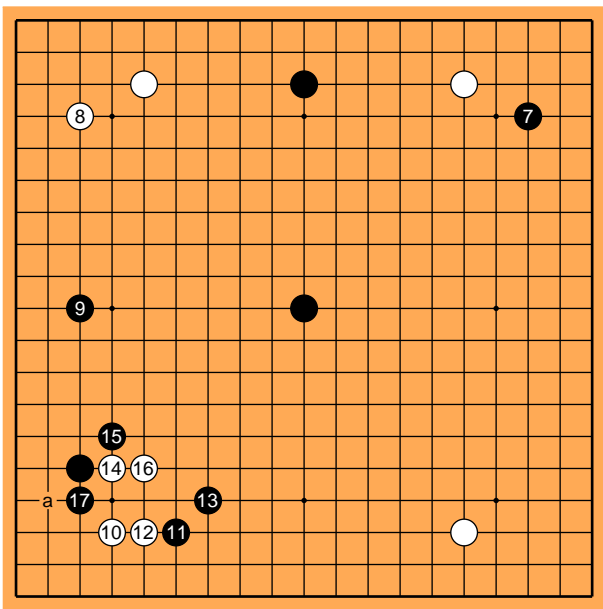


Figure 2 (7-17)

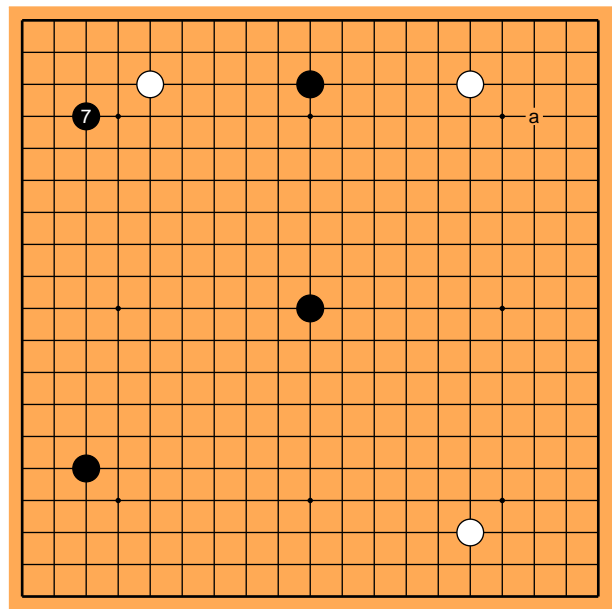


Diagram 2.1

Figure 2 (7-17)

Black 17:  
黒17はaが、ややまさる。

\*\*\*smile\_aceコメント

黒17はタケフをノゾいている位置だからであろう。

Diagram 2.1

Black 7:

黒7は実戦のaより変化図の方が天元を働かす布石である。

\*\*\*smile\_aceコメント

左下の黒との協力でより天元の石を働かせるということなのだろう。

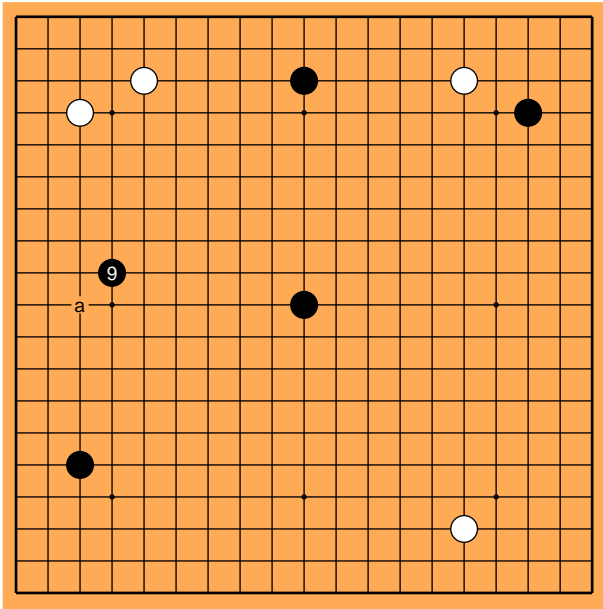


Diagram 2.2

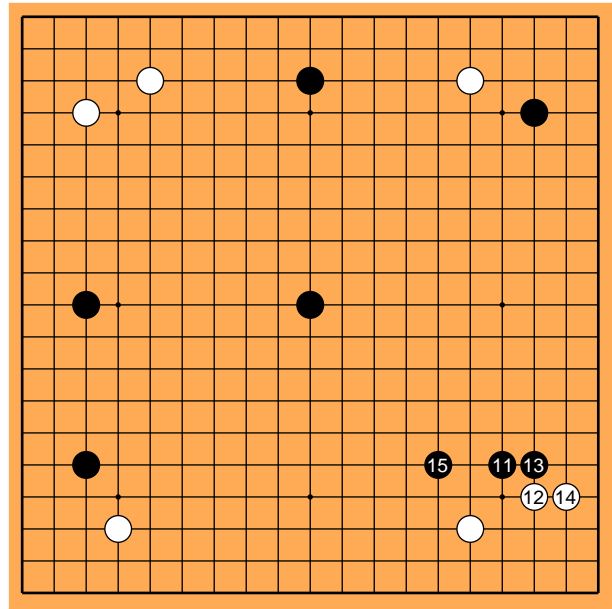


Diagram 2.3

Diagram 2.2

Black 9:

黒9は実戦のaより変化図の方が天元を働かす布石である。

\*\*\*smile\_aceコメント

黒3が3線なので4線の方が黒3とのバランスがよく、天元との相性も良いということだろう。

Diagram 2.3

Black 15:

黒11も変化図の様に右下隅に掛かり黒15までの様に打つ方が天元にふさわしかった。

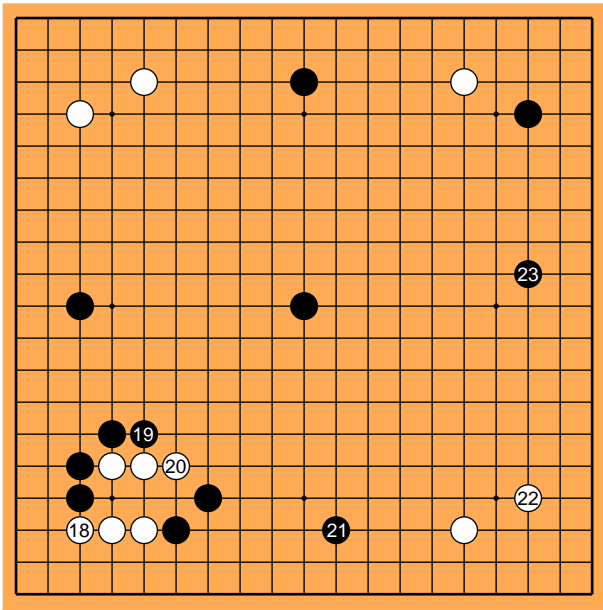


Figure 3 (18-23)

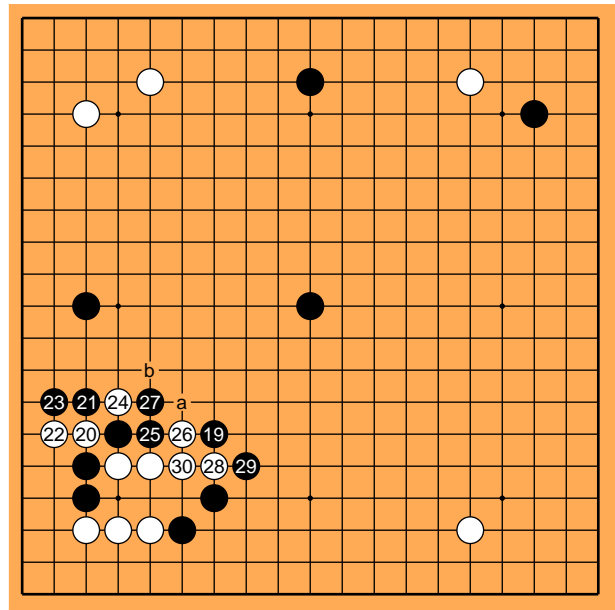


Diagram 3.1

Figure 3 (18-23)

Black 23:  
天元に打った関係か、全ての辺に黒が先着している。

Diagram 3.1

White 30:  
黒19は変化図の様に打つのが定石であるが、ここでは、黒21のキリ以下白30までと打たれて困るので、実戦の様に黒25と押したものと思われる。  
変化図の白28でaと出るのは味消しで単に28と割り込んで、場合によってはbからのアテを含みにするのが良いのである。

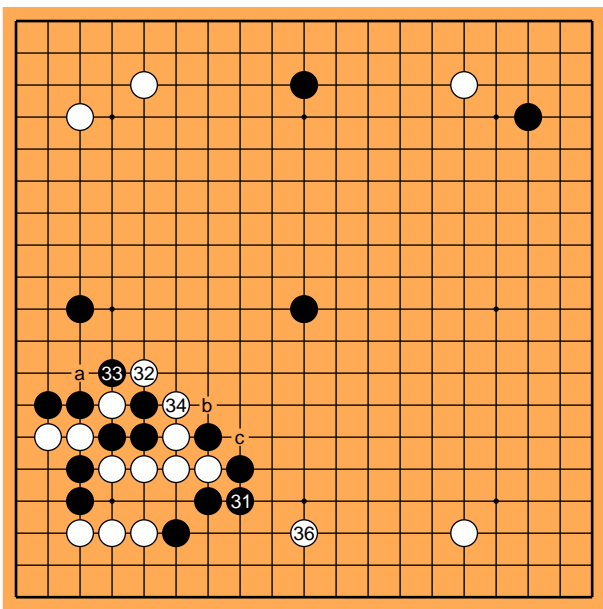


Diagram 3.2  
35 below 33

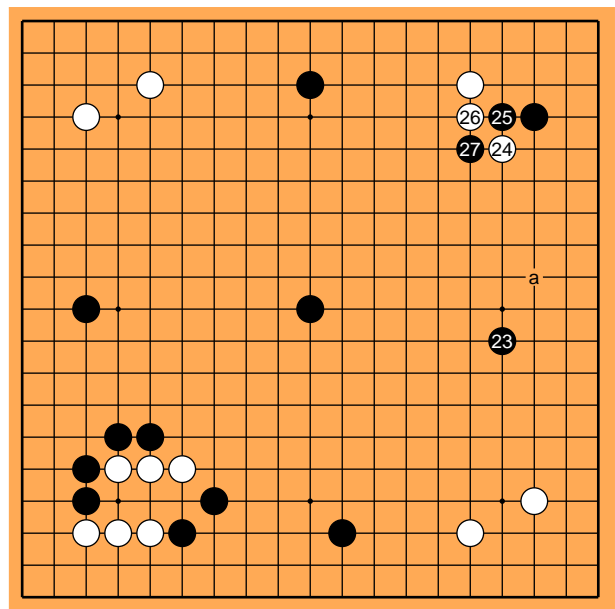


Diagram 3.3

Diagram 3.2

White 36:

白31までの呉九段の変化図に白36までを加えてみた。  
 定石書によれば、黒19に対しては白26とコスミツケ、黒a、白b、黒cとなっている。  
 この碁では、右下の白4の石とあいまって下辺にヒラキヅメするのが厳しく、また、左辺黒9の位置が黒不満なので、この変化図が白有力ということなのだろう。

Diagram 3.3

Black 27:

実戦の黒23(黒a)はあまく、変化図の様に黒23と打ち、白24のカケには出切って打ちたい。

\*\*\*smile\_aceコメント

実戦の黒23(a)が低いので、実戦でもカケてきたら出切りたいと思っていたが、黒23と4線ではあるが2路遠い援軍を当てにして、出切るという感覚はピンと来ないが、そういうものなのであろう。

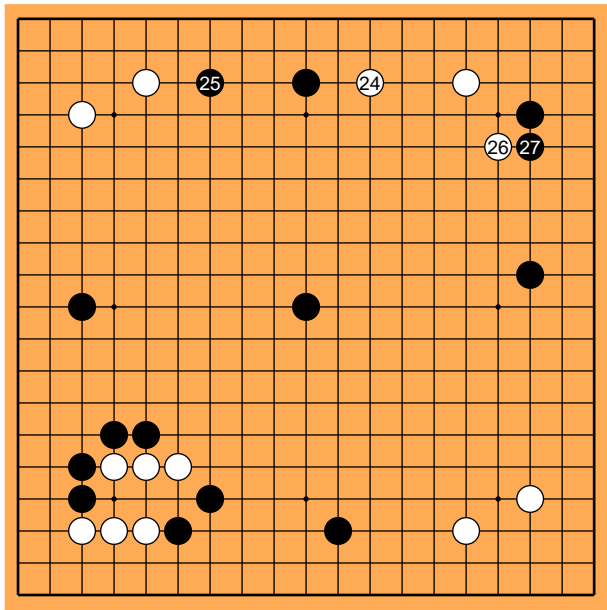


Figure 4 (24-27)

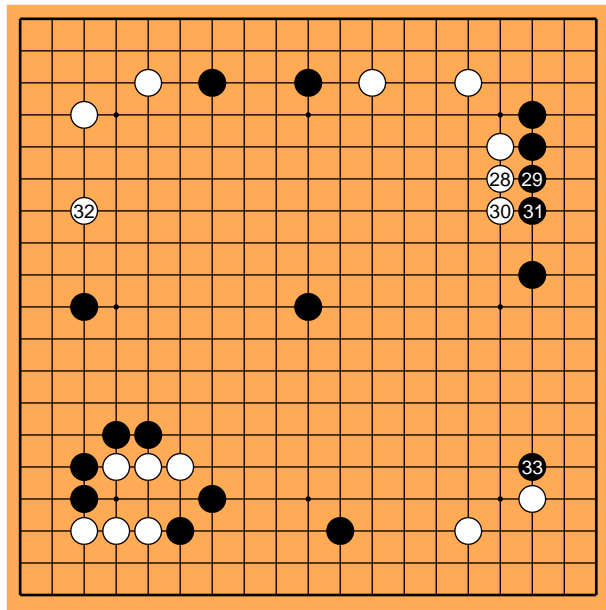


Figure 5 (28-33)

Figure 4 (24-27)

Black 27:

黒23があるので、出切りたいところだが、白も2間だから辛抱するべきなのだろう。

Figure 5 (28-33)

Black 33:

黒33

黒23が無ければ、白30の下にハネる手が急がれるのだろう。

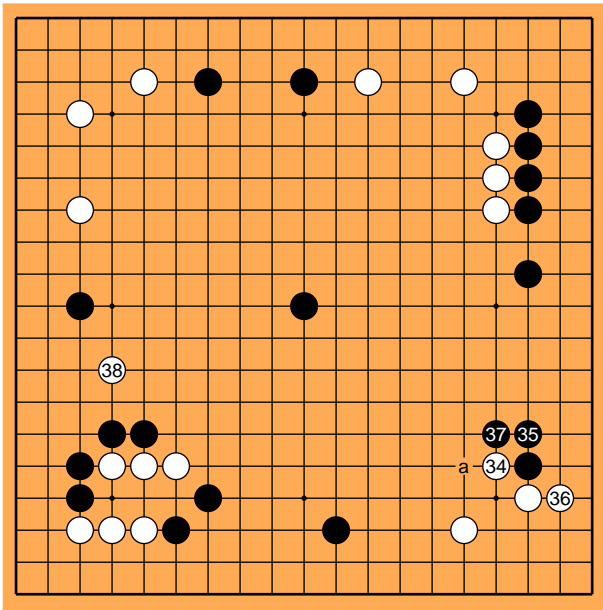


Figure 6 (34-38)

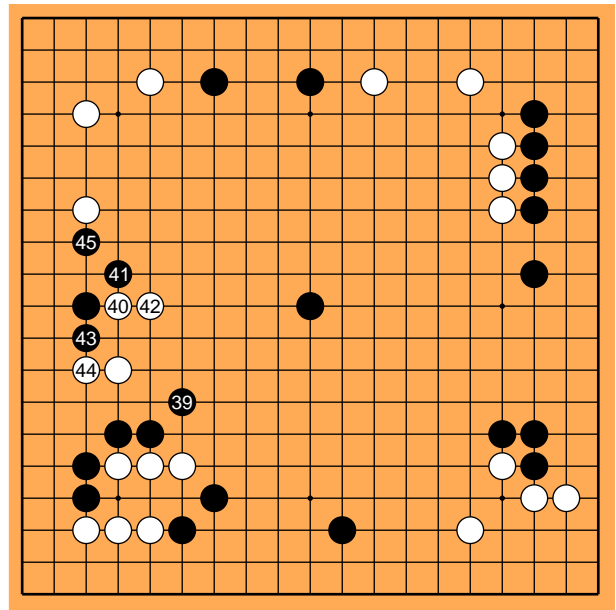


Figure 7 (39-45)

Figure 6 (34-38)

White 38:

白38

aにノビる手が急がれる感じだが。

\*\*\*呉九段の解説

白38はaに受けているのもあろう。

Figure 7 (39-45)

Black 45:

黒39、45と苦心の結果の運びで、打ち碁の鑑賞には常にこうした苦心の変化の理解が大切なのである。

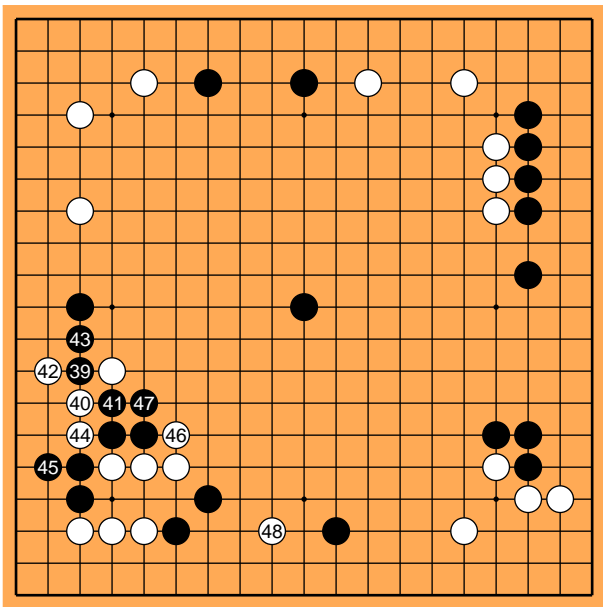


Diagram 7.1

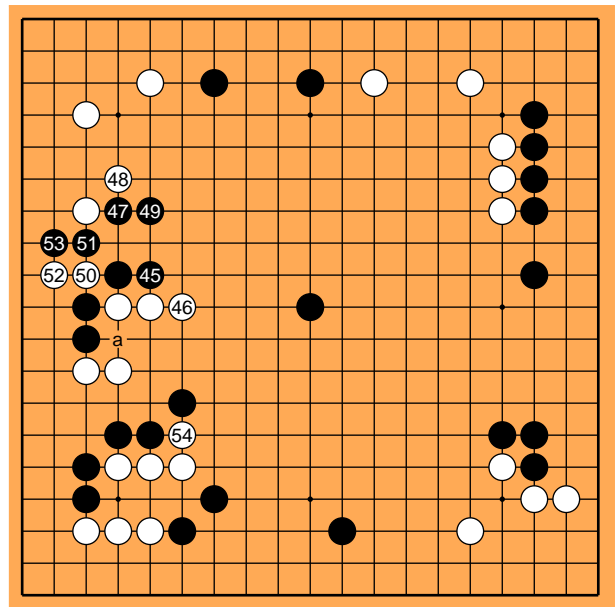


Diagram 7.2

Diagram 7.1

White 48:

白38は変化図の様に黒39と打てば、白46まで利かして、白48と打ち込む狙い。

Diagram 7.2

White 54:

黒45では変化図の様に普通に黒45に押すと、以下53までとなった時に白54とキルツケられて困る。

\*\*\*smile\_aceコメント

白aが利いているから封鎖される手があるということなのだろう。以下変化図を作ってみる。

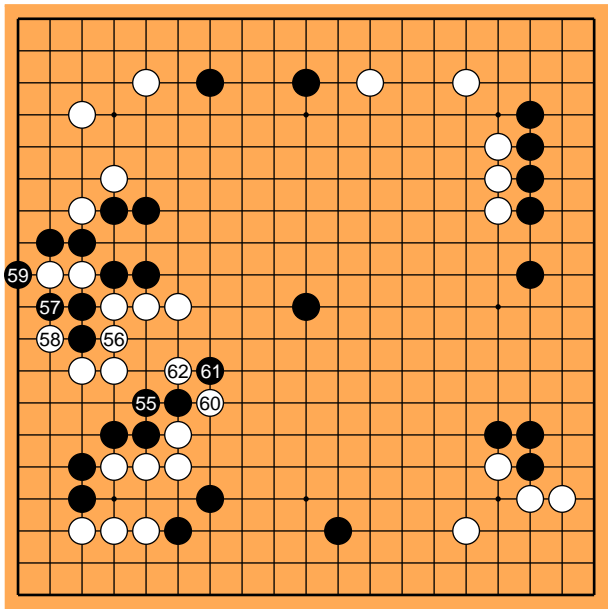


Diagram 7.3

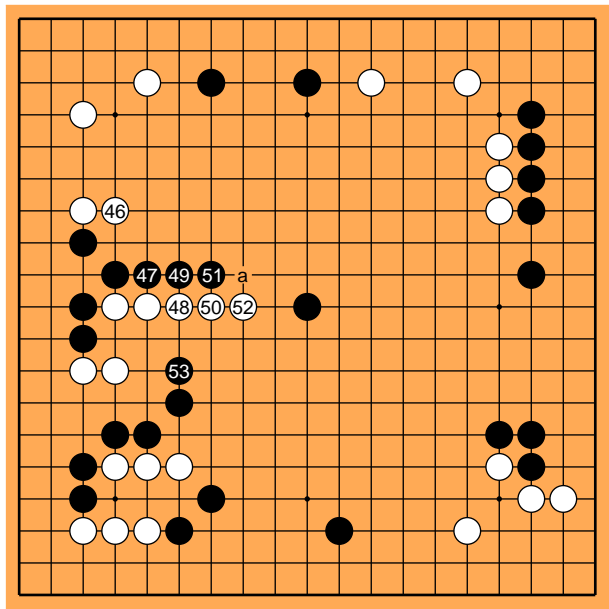


Figure 8 (46-53)

Diagram 7.3

White 62:

黒55以下はsmile\_aceの変化図

Figure 8 (46-53)

Black 53:

色々な利きがあるところだから、ここで黒53に限定してしまうのは疑問ではないか？

\*\*\*呉九段の解説

黒53は悪手で、この手では変化図の様に黒aに押して打つところであった。

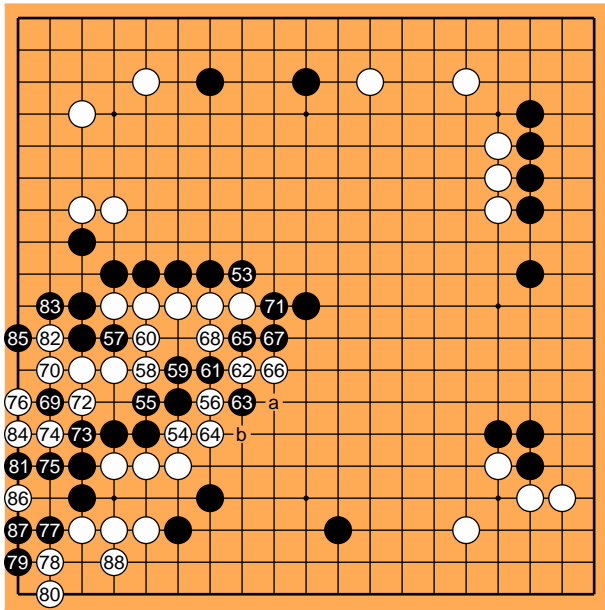


Diagram 8.1

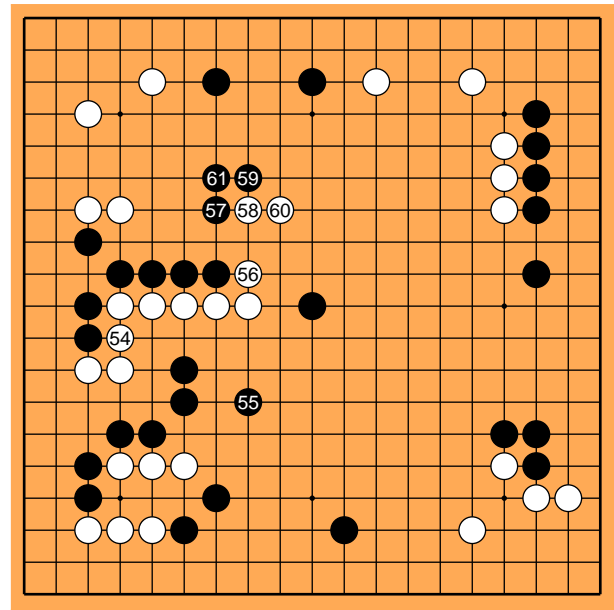


Figure 9 (54-61)

Diagram 8.1

White 88:

実戦の黒53（59のノゾキ）は悪手で、変化図の様に運びたかった。結果は白88までが予想される。変化図は、一応セキであるが、黒にはaやbの楽しみ（セキクズレの可能性）がある。

Figure 9 (54-61)

Black 61:

この実戦の図は白56のマガリが天元の石を無力化しており、黒53で黒56と押した変化図に比較して、働いていない。

初手天元は後世の棋士も数多く試みている。しかし、理論としては認められるが、実践で、天元の石を生かす打ち方はなかなか難しい。

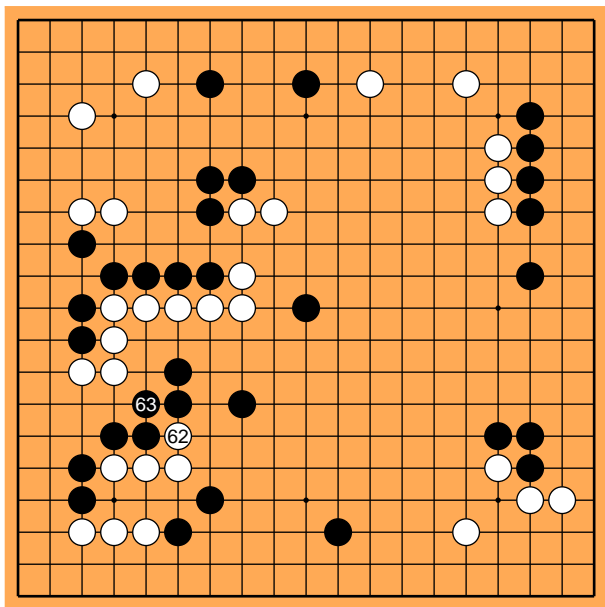


Figure 10 (62-63)

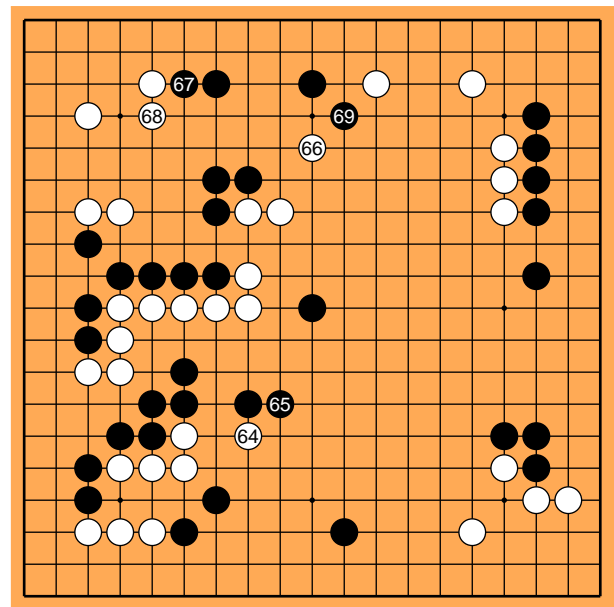


Figure 11 (64-69)

Figure 10 (62-63)

Black 63:  
黒63は辛い受け

Figure 11 (64-69)

Black 69:  
黒68  
この手では、白34の左にアテるチャンスではないか。

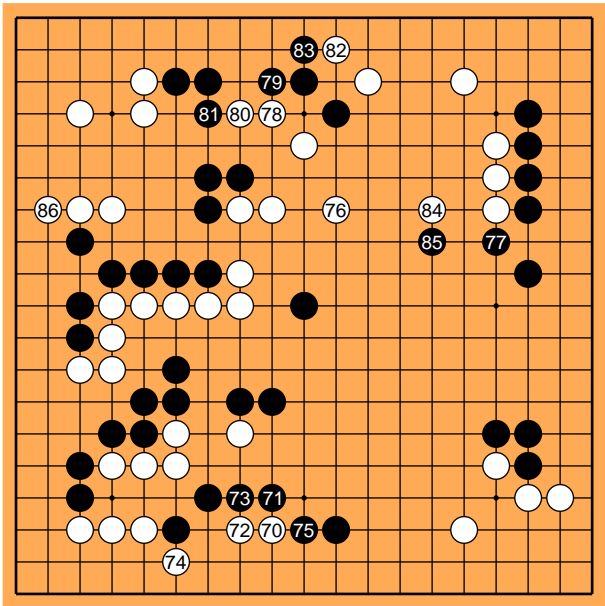


Figure 12 (70-86)

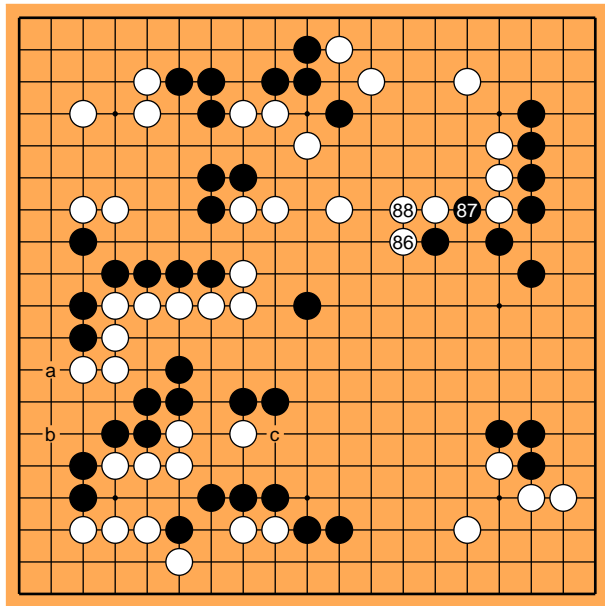


Diagram 12.1

Figure 12 (70-86)

White 86:  
白86のサガリが、この一局において、唯一の疑問手で、打ちすぎと見る。

Diagram 12.1

White 88:  
白86では変化図の様に中央を厚くし、白a、黒b、白cを狙いとして白の優勢となろう。

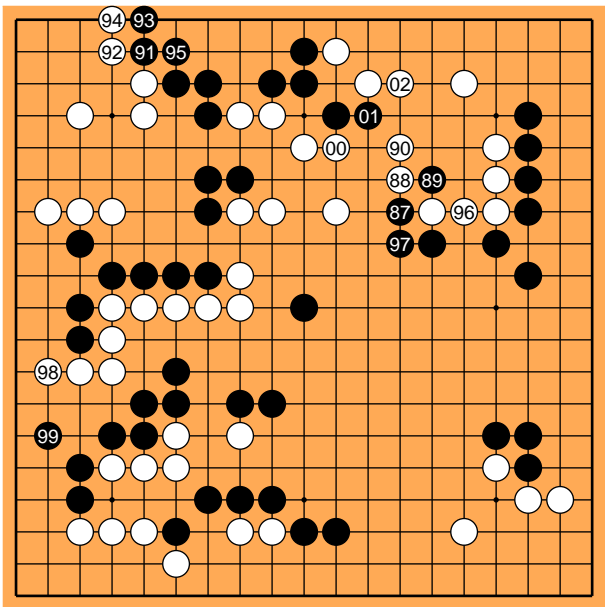


Figure 13 (87-102)

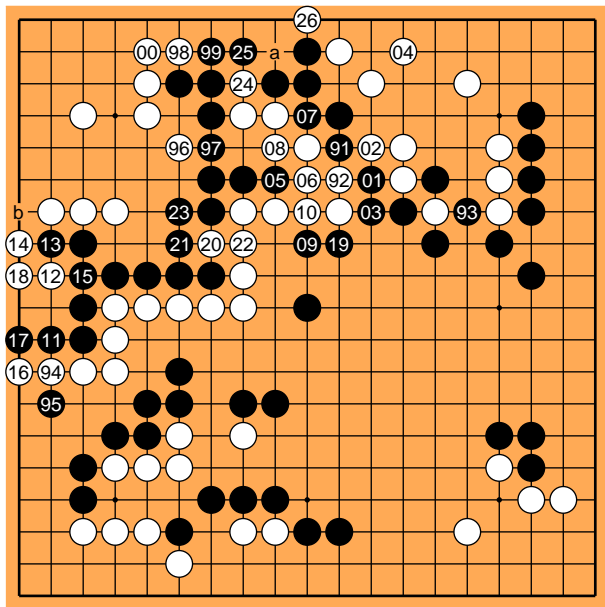


Diagram 13.1



Diagram 13.1

White 126:

黒91で変化図の様に打つと、攻め合いは白負けである。ダメは同じ11手だが、左辺の白はすぐ入れないので白の2手負けである。

他の実戦譜をみる限り、この攻め合いが読めない筈はなく、おそらく道策の油断であろう。算哲には惜しい場面であった。

\*\*\*smile\_aceコメント

上記のダメの数は外ダメを言っており、

1. 黒の手数

黒aと打つと12手だから、黒aと打つ手と相殺して11手。すぐ入れないとは、白bと打ってからダメを詰めることになることを言っている。

2. 白の手数

単純で11手。

3. 黒が先手であることと、白bと打つ必要があるので黒が2手勝っているということである。

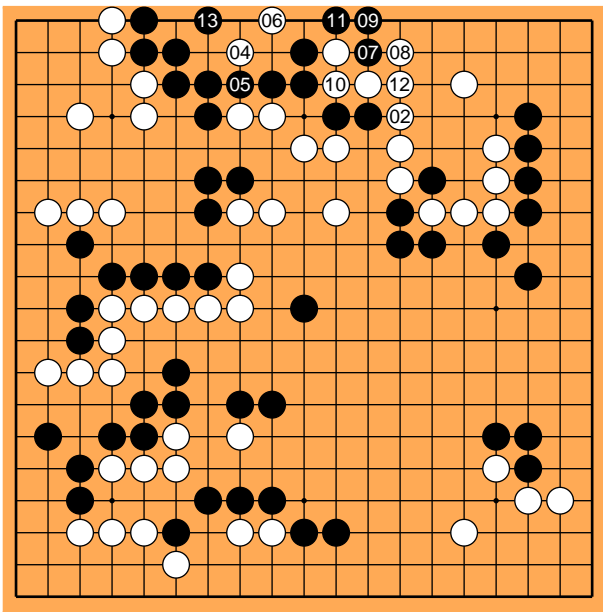


Diagram 13.2

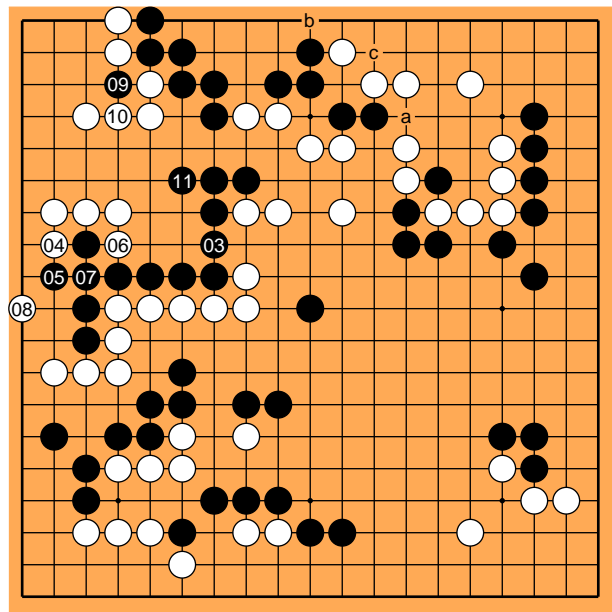


Figure 14 (103-111)

Diagram 13.2

Black 113:

白102で変化図の様に押さえると上辺から左辺にかけての黒の大石が手抜きで生きとなる。つまり、白104、106の時黒107から黒111のアテが利き、黒113で生きとなる。

Figure 14 (103-111)

Black 111:

黒111

一路上にノゾかれるとつなぐ余裕がない状態になるのでやむを得ないところなのだろう。

\*\*\*呉九段の解説

白102でaと押さえると黒そのまま生きているが、白102と打たれると、上辺に2眼ないので、黒111が必要となる。

\*\*\*smile\_aceコメント

白102はsmile\_aceなら何の疑問もなく、白aに押さえるだろうが、眼取りになっているとは。でも、bのサガリからcのハサミツケがある形だから、よく出会う形ではある。

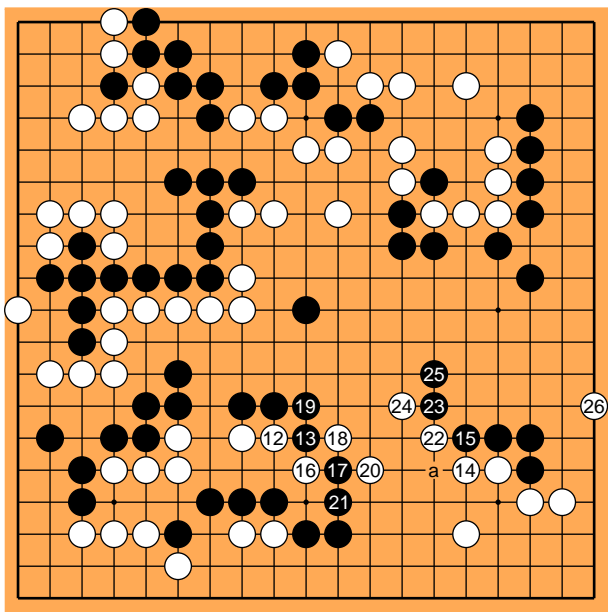


Figure 15 (112-126)

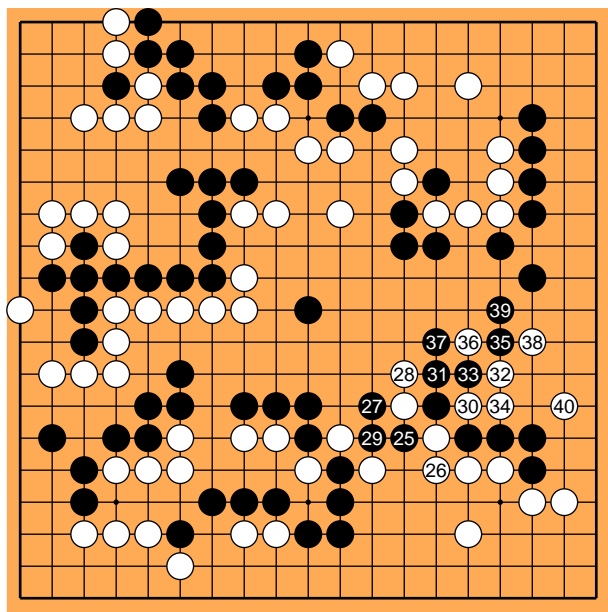


Diagram 15.1

Figure 15 (112-126)

White 126:

白122、124は自慢の二段バネで、黒125でaと切ってもbのツギで黒うまく行かない。やむを得ずの黒25には、間髪を入れず、白26に滑り込んで抜け目がない。

\*\*\*smile\_aceコメント

黒125で、黒bと切る変化を考えてみた。

Diagram 15.1

White 140:

黒125をこの変化図の様にアテて黒127、129とするのは右側の黒が持たない様である。

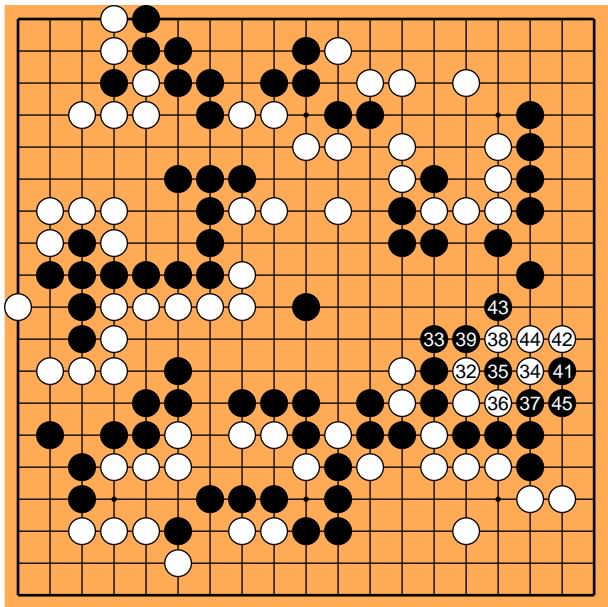


Diagram 15.1.1  
140 atBUG 135

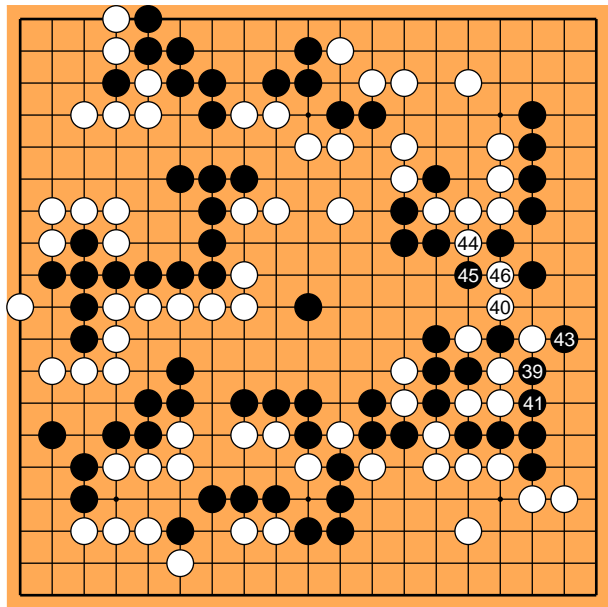


Diagram 15.1.2  
142 below 140

Diagram 15.1.1

Black 145:  
白132とアテるのはうまく行かない。

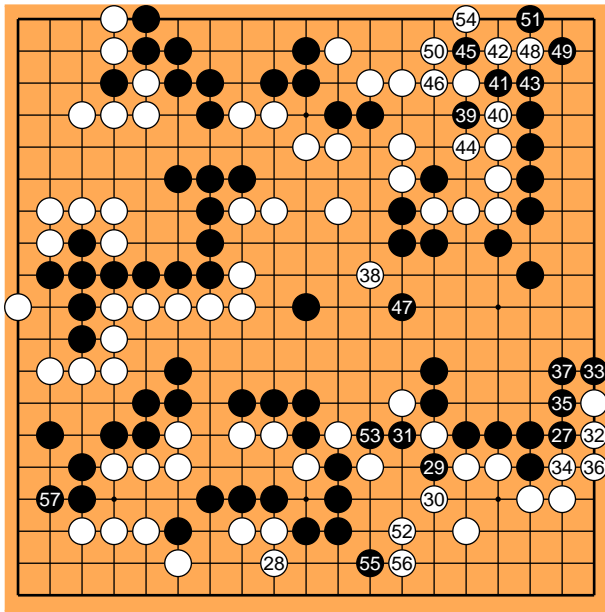


Figure 16 (127-157)

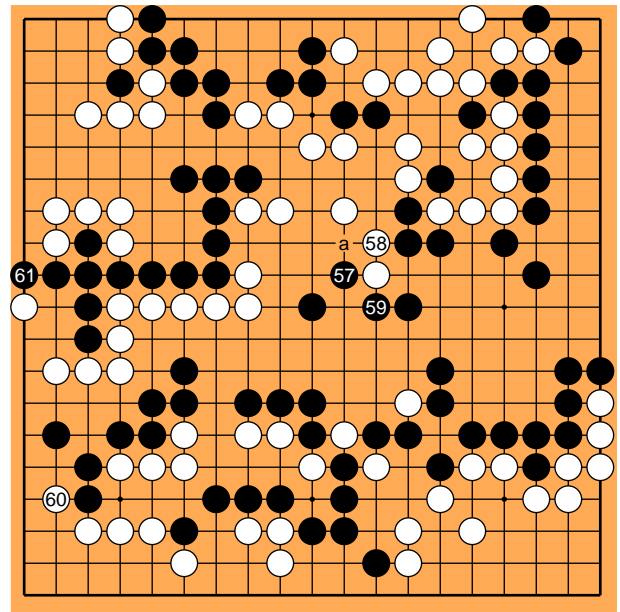


Diagram 16.1

Figure 16 (127-157)

Black 157:  
黒157は出入り9目だが、13目の手段がまだ他にあった。

Diagram 16.1

Black 161:  
黒157では変化図の様に打つのが4目得で、左下白160の9目の手より4目得である上、黒161の遮断も先手で打てるから、勝敗には関係しないが、実戦譜の白9目勝ちよりも差が小さくなる。

\*\*\*smile\_aceの変化図

呉九段の解説に黒157で13目の手が他にあってということ、考えてみたが、黒aが成立しないので答えは出せなかったが、一路違いだった。13目という数字なので、変化図の157ではとても13目は無いと感じて読まなかった。

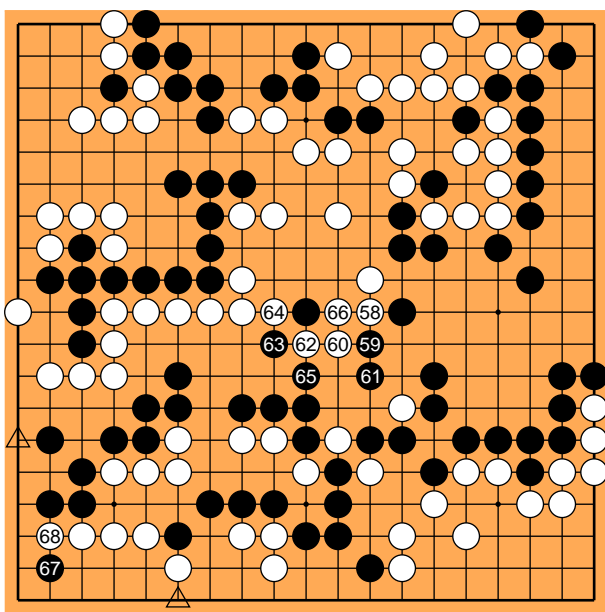


Figure 17 (158-168)

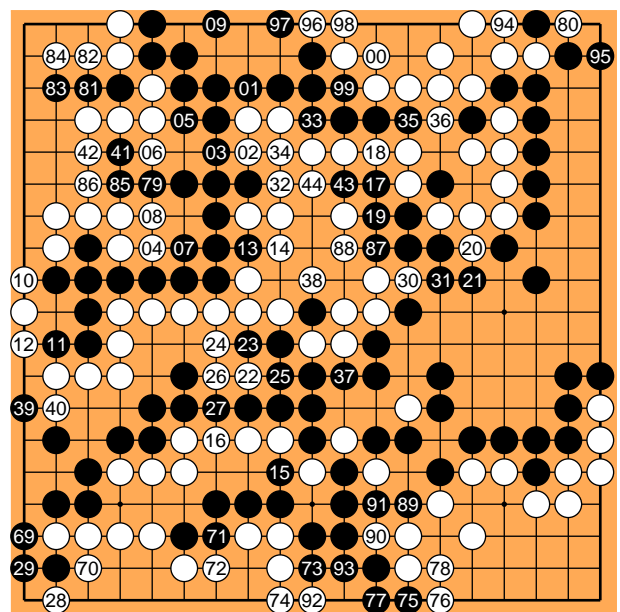


Figure 18 (169-244)

Figure 17 (158-168)

White 168:

黒167

黒168との比較はどのようなだろう。どこかでプロが、一般的にはあまり優劣は無いと書いていた様に記憶している。白12の下の切りの価値によって優劣が出て来る形ではないかと思う。

\*\*\*smile\_aceコメント

実戦の黒167と、黒168を比較してみよう。

三角の地点に石があったと仮定した場合の地の増減を考えてみる。

1. 黒167と打った場合

黒地3目、白地4目

2. 黒168と打った場合

黒地3目、白地5目

ということで、2の方が1目白が得である。ただし、1の方は黒に対するコウダテが多いというデメリットがあり、やはり、良く似た結果であるといえる。

尚、黒167とした場合のヨセの想定図を以下の変化で示しておく。

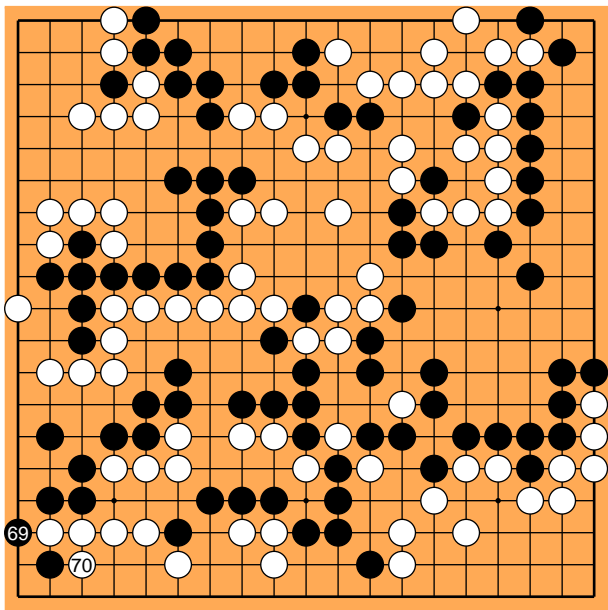


Diagram 18.1

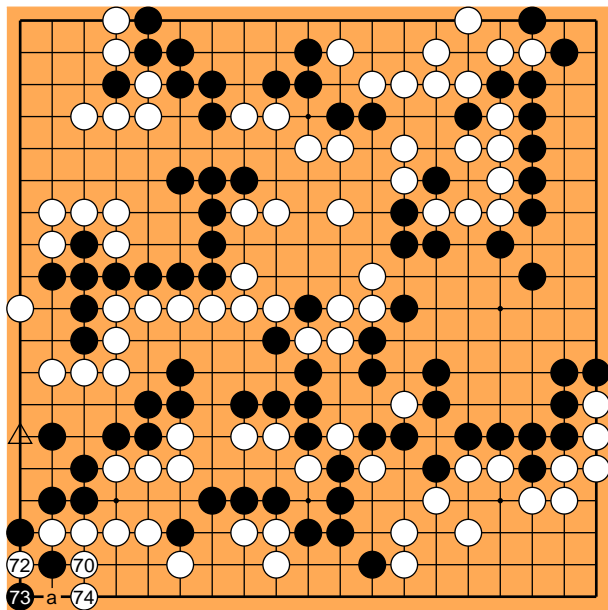


Diagram 18.1.1  
175 atBUG 172

Diagram 18.1.1

Black 175:

黒地3目の計算基礎の図である。

白172でウチカキを打っているが、これはウチカキを打たずに、単に白174と打った場合は黒175と打って黒aの後手2目の手が残し、黒が打つ可能性と白が打つ可能性は同じと考えられるから、期待値としては黒3目の地と言えるので結局同じことになる。